

知

知らない街を歩くとき、目の前に見える景色だけを頼りに進む人は、目的地までの目印をひとたび見失うと、完全に迷子になります。一方、迷わないための「地図」を自身の中に持つ人は、自分の頭上を飛ぶドローンから見える景色を、常にイメージしています。俯瞰で見て、自分が全体の中でどの位置にいるのかを把握している。だから、迷っても軌道修正ができるのです。

現代のキャリア選択にも、同じことが言えます。先行きが不透明だからこそ、目の前の景色だけではなく、マクロの動向や構造変化を俯瞰して捉えることは、次の一步を踏み出す力になるはずです。AIの進化スピードは凄まじく、産業や社会構造は5～10年という極めて速いサイクルで激変する可能性があります。もはや誰にも正確な予測はできません。一方、マクロな視点に立つことで、私たちは時間の捉え方すら変えることができます。例えば、最も死亡者数が多かった年齢を示す「死亡年齢最頻値」という数字があります。厚生労働省のデータによると、2020年の死亡最頻値は、男性88歳、女性93歳です。このデータを見ると、今の高校生にとって20代・30代のうちは、長い人生のほんの「助走期間」に過ぎないとわかります。目先の安定に執着せず、まずは多様な仕事を経験して視野を広げる、あるいはじっくり専門性を身につけるといった選択も、十分に「あり」だと思えるようになるのです。

しかし、高校生を取り巻く情報環境は、この「俯瞰する力」を遮る構造になっています。ネットには深く広い知見がある一方で、検索やSNS、AIはすべて、ユーザーの関心がある情報だけを優先して表示するレコメンド機能を持っています。これが、自覚のないまま世界を狭める「情報のタコソボ化」を引き起こしている。タコソボの中では、レコメンドされる偏った情報や、人々の関心を集めやすい悪口、不安を煽る記事ばかりが目に入り、精神的にも悪影響を受けやすくなります。タコソボに閉じこもったままでは、社会の全体地図を見渡すドローン視点をを持つことはできません。

これからの時代、不確実性を完全になくすことは不可能です。偏った情報の中で不安を膨らませるのをやめ、情報の「外側」の世界を意識して、視野を広げていく必要があります。そのためには、情報収集に「機械的なランダム性」を取り入れ、時間軸・空間軸を広げて「今何が起きているのか」を主体的に考える姿勢が不可欠です。そして、AIが人間と滑らかに対話を始めたような歴史的な大転換点に立ち会っていることを、むしろ「奇跡的で面白い」と捉え直してみる。先生ご自身が、この激変の時代を面白がる背中を見せること。そして、閉鎖的な情報のタコソボから生徒を引っ張り出し、世界の広さとランダム性を届ける媒介者になること。それは、生徒たちが自分だけの「地図」を描く力にもつながっていくはずです。

Profile

さきさ・としなお ● 1961年兵庫県生まれ。毎日新聞記者、月刊アスキー編集部を経て2003年に独立。テクノロジーから政治、経済、社会、ライフスタイルにいたるまで幅広く執筆し、著書も多数。総務省情報通信白書アドバイザーボード。「ABEMA Prime」レギュラーコメンテーター。

取材・文／塚田智恵美

佐々木俊尚

文筆家、情報キュレーター

マクロの目



目の前の景色だけを頼らず
マクロの目で現在地を俯瞰し
激変時代を面白がって進もう